

## JOMF 派遣医師便り (2019. 2)

### ◆シンガポール◆

### メリオイドーシス

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

メリオイドーシスは *Burkholderia pseudomallei* という土壤中に存在する菌によって引き起こされる人畜共通感染症です。感染は、例えば、土木工事などの際に舞上がった埃を経気道的に吸入したり、傷口がたまたま土壌や水と接触するなどして経皮的にも感染します。また、この菌に感染していた動物の肉を食べることで感染が起こる可能性があると言われています。免疫力が低下している人は発症する可能性が高くなります。

シンガポールでは、毎年数十人の発症者が報告されていて、近年でも死亡率は 15%以上です。患者数は、ここ数年は年 40 名以下となっていました。2016 年は 60 名、2017 年も 52 名となりました。2018 年は 37 名に減りましたが今後も注意が必要であると思われます。因みに、当院では過去 14 年間で 2 例経験しています。(これらについては JOMF の情報交換会にて報告しました。)

さて、今回は動物のメリオイドーシスと関連させて考えてみようと思います。シンガポールは、熱帯雨林気候に属しているため、様々な野生動物が多数生息しています。加えて、現在のシンガポールは先進国であり、ペットとしての動物個体数もイヌ、ネコのほか、トリなどを含めると約 80 万個体まで増えているそうです。また、動物園などにも 1 万 6 千個体以上、その他、いくつかの農場にも多数の動物が飼育されています。

これらの動物のうち、この菌に、少なくとも哺乳類全般と鳥類は感受性があるようです。1983 年から 2016 年までに 454 例の動物の感染例が報告されました。また、報告によると、動物の中でもなぜかゴリラの感染例が目立つとのこと。シンガポール動物園などの記録によれば、1983 年ゴリラ 4 頭がメリオイドーシスで死亡しました。その後、1992 年に新たに 2 頭が輸入されましたが、そのうちの 1 頭がシンガポールに来てわずか半年でメリオイドーシスを発症し死亡しました。そのため、残っていた 1 頭は程なく、元の動物園に返されたそうです。その他、霊長類 12 例、草食哺乳類 10 例、肉食哺乳類 1 例、鳥類 9 例が報告されています。

感染源は環境中の土壌、または水と考えられています。動物園の動物は、厳しく管理され、病気になれば詳しく検査もされます。農場でも同様です。しかし、一般のペットの場合にはどうでしょう。特に最近多くなった高齢ペットが元気がなくなった場合など、診断されずに死亡した例は少なくないかもしれません。

環境中の水や土壌の調査が幾度か行われていて、サンプルに対する菌の陽性率は、調査により異なりますが、0~6%の間ようです。環境から感染する可能性は無視出来ません。

人々の生活が豊かになり、多くの家庭でペットが飼われています。屋内で飼っているペットでも散歩に外にでて、公園に行ったりし、環境の土や水と接触する機会があります。そう

したペットが感染したり、ペットの排泄物や持ち込んだ土などから感染する可能性もあります。

気になるのは、社会が感染症に対し脆弱性を増しつつあることです。シンガポールは国民の約11%が糖尿病であり、高齢化も急速に進んでいます。治療で免疫抑制作用のある薬剤を使用している人も少なからずいらっしゃいます。結果、社会に免疫力が低い人が多くなっています。

また、裸足で子供を外で遊ばせている光景を見ることがありますが、これは、当地が熱帯雨林地域であることを忘れ、土壌からの感染症があることを知らないか忘れていた象徴であるような気がします。

こうした背景を鑑みつつ、今後もメリオイドーシスを注視していきたいと思えます。